



### 三所物（みどころもの）

一般的に「刀」という場合、広い意味では日本刀全体のことを指しますが、歴史小説や剣豪小説、時代劇などで皆さんに一番なじみがあるのは「打刀」と呼ばれるもので、刀身が2尺（約60センチ）以上あり、いつでも簡単に刀を抜けるように刃を上にして腰に差していました。

打刀の原形は鎌倉時代から見られますが、打刀に比べはるかに短く「刺刀」と呼ばれていました。南北朝時代になると長い刀剣が流行し、刺刀も長くなり打刀の形式にだんだんに近づいていったわけです。

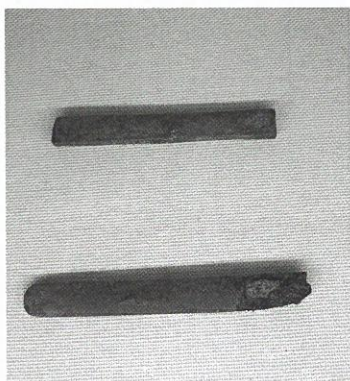
さて、打刀には刀装具という付属

品が備え付けられていました。刀装具とは、刀剣を外側から保護し、使いやしくするために不可欠な外装用の金具のことで、目貫・筭・小柄などがこれにあたり、「三所物」と呼びます。

「目貫」は柄の側面につける飾り金具ですが、本来は刀身を柄に固定する目釘の役目や手のすべりを止める目的がありました。「小柄」は鞘に付属する細身の小刀で、元来はペーパーナイフ的に用いられていたため、武器としての役割は持ちません。「筭」は、髪の流れを直すなどの身だしなみを整える際に用いられる小道具で、特に小柄・筭の二つは共に武士にとって最小限必要な身の回りの道具でした。

実はこの小柄、九戸城跡からも銅製のものが出土しているのです。

さてさて、誰からの手紙をこの小柄で開けていたのでしょうかね：



三所物は、武士にとって必需品の一つでした

## こみゆてaたいむ

37秋目

### こだしの情報をお寄せください

平地が少ない二戸地方は古くから山間部に畑をつくり、ソバやヒエなどの雑穀を主食とする生活をしてきました。その生活の中で、平野部とは違い、木の実などを活用した食事や木の皮を活用した道具づくりなど、山の資源を活用した生活文化がつくられました。

その山間部で生まれた文化の一つが「こだし」です。ところで「こだし」とは何？と思われる人もいらっしゃると思いますが、「こだし」はヤマブドウのつる皮などで編んだカゴのことです。

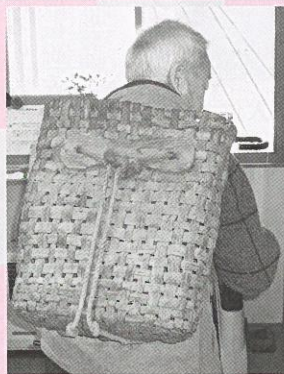
この「こだし」は「こだす」とも言われており、山や畑でとれた収穫物や山仕事に行く際に弁当やのぎりを入れるカゴで、背負うタイプや腰につけるタイプがあります。

また「こだし」は何十年も使用することができるほど丈夫なカゴです。

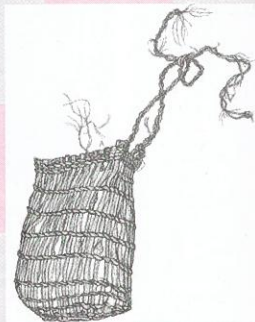
数十年前までは多くの家庭にあった物ですが、今では保存されている人は激減し、希少な物になってしまいました。

そこで楽しく美しいまちづくり協議会では、この「こだし」の文化を後世に残すためにも、新たな活用方法などについて検討中です。

「家に「こだし」があります」や「「こだし」は無いけれど作り方を知っています。」など、貴重な樹皮文化を途絶えさせないためにも皆様からの情報をお待ちしております。



これは一例です。こだしには色々なタイプのものがあります



この欄の問い合わせは、市地域づくり推進課（内線 655）まで